呼吸器内科

（スタッフ）

部長　　：安東　優（2020. 4 月から）
部長　　：大谷　哲史（2020. 3 月まで）
主任医師　：菅　貴将（2020. 4 月から）
嘱託医　　：内田　そのえ
　　：表　絵里香
　　：宮﨑　周也　　（2020. 4 月まで）
　　：宮崎　幸太郎　　（2020. 3 月まで）
専攻医　　：廣田　昇馬　　（2020. 4 月から）

人事に関しては、令和２年４月１日、大谷哲史部長から安東へ交代となり、宮崎幸太郎医師が転出しました。また、宮﨑周也医師はコロナパンデミックのため１か月間病院に残り業務支援していただいた後に大分大学医学部大学院へ進学されました。４月１日から新たに菅貴将医師、廣田昇馬医師が赴任し、異動のなかった内田そのえ医師、表絵里香医師と合わせて、５名体制で診療、教育を行いました。

（診療実績）

はじめに、本年は新型コロナウイルス感染症の大流行で多くの方々がお亡くなりになり、また後遺症に悩まされています。呼吸器内科はその第一線で働く部署であるため、スタッフ一同大変な１年でしたが、幸い大きな事故なくどうにか無事に越すことができました。これもひとえに病院長のご指示のもと病院全体で支えていただいたおかげです。病院スタッフすべての方に御礼申し上げます。

入院患者数は 634 名で、昨年よりも 24 名増加しました（図１）。外来患者数は、総数では昨年と変わりませんでしたが、本年は新患患者が減りました（図２）。新型コロナウイルス感染症で定期通院患者の受診控え、および当院への紹介を控えた医療機関が増えてしまった可能性があります。入院患者の内訳は肺がん 272 名（43%）、感染症 216 名（30%）、びまん性肺疾患 79 例（11%）、呼吸不全 18 例（２%）、アレルギー性疾患 13 例（２%）であり、昨年とほぼ同様でした（図３）。新型コロナウイルス感染症の影響で、入院患者が激減するものと危惧しておりましたが、入院総数はなんとか維持することができました。特筆すべきことは入院患者の中で新型コロナウイルス感染症患者が 31 例（4.9%）含まれていたことです。当科は中等症以上の患者（SpO2 93% 以下で酸素投与が必要となる患者）を主に担当することになっております。第３波に襲われましたが、緊急事態宣言の発動で中等症以上の患者数が少しずつ減り始めました。今後重症患者が増えないためにも市中感染が収まることをただただ祈るばかりです。

気管支鏡検査については、呼吸器内科、呼吸器腫瘍内科合わせて 2017 年 252 例、2018 年 248 例、2019 年 242 例、2020 年（本年）239 例で例年通りの実績でした。コロナ禍においては、なるべく気管支鏡検査を避ける風潮がありますが、今年度の検査数はコロナを恐れずエビデンスに基づいた診療を継続・実践していることを反映しているものと思われます。本年度呼吸器内科で実施した気管支鏡検査数は 220 例（重複例含む）あり、経気管支的肺生検（TBLB）113 例（51.3%）、気管支肺胞洗浄検査（BAL）57 例（26.0%）、経気管支的リンパ節生検（TBNA）37 例（16.8%）でした（表１）。TBLB はほとんどの症例が肺がん、転移性肺腫瘍など悪性疾患の診断のための検査でした。一方 BAL については、肺がん 17 例、びまん性肺疾患 24 例、抗酸菌感染症 12 例、その他肺真菌症やアレルギー性気管支肺真菌症２例に対し実施されました（表２）。びまん性肺疾患に対する BAL の施行数が少ない傾向ですが、患者が高齢であること、呼吸状態不良の患者が多いことなどが原因かと思われます。しかし、診断に有用な検査ですので、検査数減少は今後の課題かと考えます。

当院は地域がん診療連携拠点病院（高度型）であり、当科では肺がん診療に力をいれています。当科の役割としては肺がんの診断はもとより、呼吸器腫瘍内科、呼吸器外科、放射線科、病理部門と密に連携をとり、最善の治療を提供することだと思います。毎週水曜日にキャンサーボード、２か月に１回症例検討会を開催し、診断治療に悩む症例について十分な検討をしております。また、臨床試験にも複数登録し、新たなエビデンスの構築を目指しております。喘息、慢性閉塞性肺疾患については主に外来で診断、治療をしています。近年多くの新薬が上市され、コントロールもよくなりつつありますが、治療に難渋する患者の紹介も増えております。適切な分子標的薬の提供を実践しています。重症肺炎、重症呼吸不全に関しては、開業の御施設から多く紹介されます。救急科と連携して最善の治療ができるように努めております。その他、診断や治療に苦慮する症例、稀少症例などは、日々のカンファレンスで提示し、スタッフ全員で議論するようにしています。このような症例については、学会発表や論文報告できるように努めています。

（研修・教育）

当科では新・内科専門医制度で求められる技術・技能評価手帳に記載された項目は研修中にすべて経験することができます。また、呼吸器外科と共同で日常診療にあたっており、研修手帳（疾患群項目表）に記された疾患の多くを経験できるものと思います。

研修医の先生は指導医とペアになってもらい主に病棟を担当してもらっておりますが、希望があれば外来診療の研修も可能です。

2020年度は1年目研修医　児玉洋資、重見英仁、柴田稔文、中尾優衣、後藤未央、久下舜介、舩木康介、平田健悟、丸山莉果、岩本美由希、濱﨑俊輔、古屋伶樹、松本紘明、2年目研修医　内海杏香、杉本未来、山中茉莉夢、時永優希の各先生方が呼吸器内科の研修を行いました。

（今後の方向性）

来年も新型コロナウイルス感染症の流行は収まらないと思われますので、重症患者の治療をしっかり行ってまいります。また、日常診療に追われる中でも、学会発表を積極的に行い、可能であれば論文報告を目指します。呼吸器内科は肺がん領域、アレルギー領域、感染症領域、呼吸不全領域など多彩ですが、近年新しい新薬や治療法が開発されつつあります。これまで以上に積極的に臨床試験に参加して、新しいエビデンスの確立に貢献したいと考えています。

（文責：安東優）

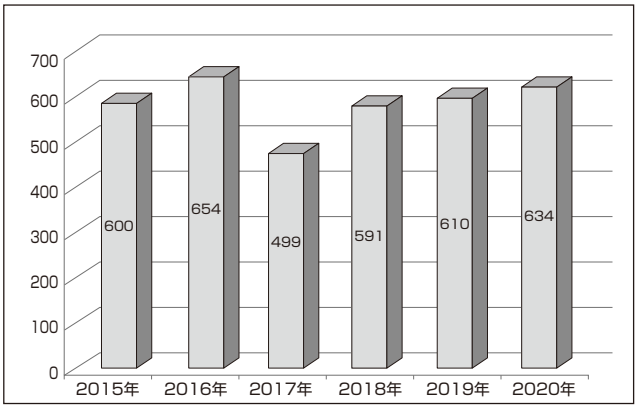


図1　入院患者数

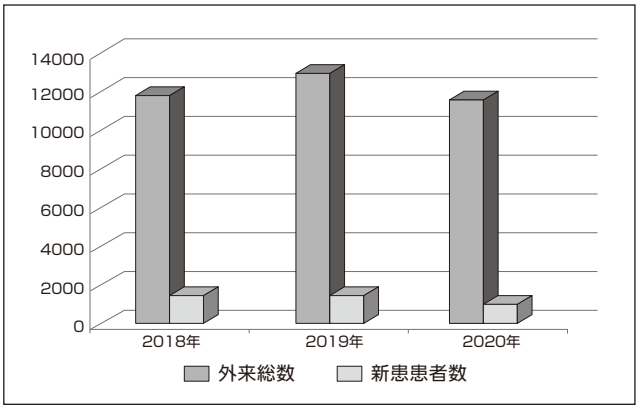
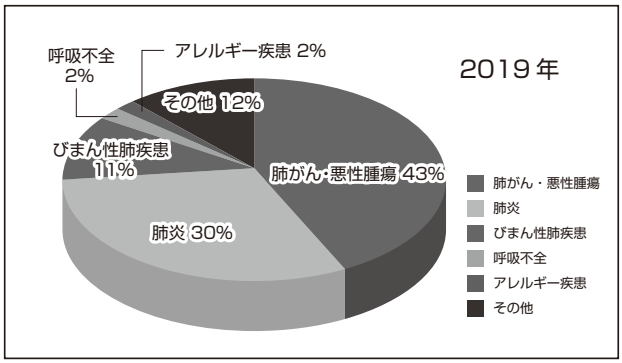


図2　外来患者数内訳



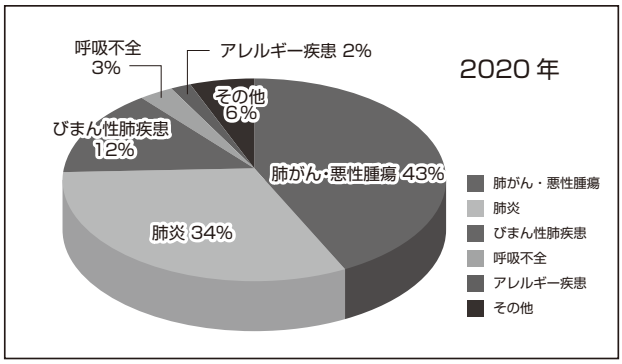


図3　入院患者内訳

表1　気管支鏡検査実績

	人数	頻度
気管支観察	13	5.9 %
気管支肺胞洗浄（BAL）	57	26.0 %
気管支肺生検（TBLB）	113	51.3 %
経気管支リンパ節生検（TBNA）	37	16.8 %
合計	220	100 %

表2　気管支肺胞洗浄対象疾患

	人数	頻度
びまん性肺疾患	24	42.1 %
悪性腫瘍	17	29.8 %
抗酸菌感染症	12	21.1 %
真菌感染症	2	3.5 %
その他	2	3.5 %
合計	57	100 %